

翻訳：『ヨークシャーの悲劇』（1608）

高 谷 修
桑 山 智 成 訳

『ヨークシャーの悲劇』（*A Yorkshire Tragedy*）の戯曲テキストは、W. シェイクスピア（W. Shakespeare）によって書かれ、国王一座（King's Men）がグローブ座で上演した作品として、1608年に発行された。しかし1623年に出版されたシェイクスピア戯曲全集のファースト・フォリオ（First Folio）には含まれなかった。1664年には、サード・フォリオに他六作品と共に加えられたが、現代のシェイクスピア批評においては、これがシェイクスピアによるものではないとする見解が定着しており、2010年にはトマス・ミドルトン（Thomas Middleton）作としてオクスフォード大学出版局のミドルトン作品集に収められている。

『ヨークシャーの悲劇』は1605年4月23日に実際に起こった事件が元になっている。ヨークシャーのウォルター・カルヴァリー（Walter Calverley）が、三人の息子は妻の不倫によって生まれたと考えて、また妻によって命が危険に晒されたとして、家族の殺害を試み、二人の息子が死に至った。同年にパンフレットやバラッドも出版されるほどイングランドで話題になった事件であった（パンフレットのみが現存している）。

戯曲テキストとしては、ジョージ・ウィルキンズ（George Wilkins）作の

『強制結婚の不幸』（*The Miseries of Enforced Marriage*）が、1607年に出版されている。しかし、この芝居では家族の殺害は行われず、事件を描いたパンフレットに近いのは『ヨークシャーの悲劇』の方である。400年前の作品とはいえ、現代でも問題となっているドメスティック・バイオレンス（DV）を扱っている点で意義深く思われる。

本作は想像力豊かな台詞や演劇性で観客を別世界に誘うというよりも、むしろ、事件やいわゆる犯罪心理についての観客の現実的な興味を満たす内容となっている。当時の演劇では、シェイクスピアの悲劇や喜劇のように、観客世界とは時空を大きく隔てた、想像力溢れる作品だけでなく、こうした演目も上演されたわけである。ただ、この作品は全体で700行程と短く、『結局全て一つ、またの名を四作入り芝居の一つ』（ALL'S ONE, OR, *One of the four Plaies in one*）という副題が示すように、他の三作品と共に一つの上演を構成したと思われる。

近年イギリスでは、本作品は1986年にはレヴェルズ・プレイズ（Revels Plays）の一つとして編集、出版され、2010年には上述のミドルトン作品集にも編集して収められた。ラジオでは、『ヨークシャーの悲劇』は1955年と1957年にBBCで放送され、劇場では、1958年～1982の間に、バーミンガム・レパトリー・シアター（Birmingham Repertory Theatre）による公演も含め、四度、プロの劇団によって上演され、1987年にはナショナル・シアターのコッツロウ小劇場（Cottesloe）で（一公演のみだが）上演されている¹。

しかし日本では、我々の知る限り、翻訳は本稿が初めての試みであり、上演の記録も残っていない。この翻訳が、『ヨークシャーの悲劇』への演劇的な関心、あるいは、他作品との関連といった演劇史的な関心を喚起できることを

1 A. C. Cawley and Barry Gaines, Introduction to *A Yorkshire Tragedy*, The Revels Plays (Manchester UP, 1986), 24-26. Stanley Wells, Introduction to *A Yorkshire Tragedy*, in *The Collected Works of Thomas Middleton*, eds., Gary Taylor, et al. (Oxford UP, 2010), 454.

願っている。なお、翻訳に当たっては 1608 年出版のテキストを中心とし、必要に応じてそれ以降の版も適宜参照した。

『ヨークシャーの悲劇』

少し前に起こった誠に嘆かわしい悲劇

国王一座によってグローブ座で上演

W. シェイクスピア作



ロンドンで

R. B によって、トマス・ペイヴィヤーのために印刷され、
取引所の近くのコーンヒルの店で販売予定。

1608 年



『結局全て一つ』

またの名を

『四作入り芝居の中の一つ』

称して『ヨークシャーの悲劇』

国王一座によって上演

第1場²

（2人の使用人オリヴァーとラーフ登場）

オリヴァー おい、ラーフ、若奥さんは哀れにもかなり取り乱しておられるな、
愛する人が長らく留守だから。

ラーフ だが彼女を責められるかい？ リンゴは枝に実っている時間が長ければ長いほど、熟した時に、たくさん地面に落ちるものだ。すなわち、
狂った娘っ子たちは、いい時期に収穫されないから自分たちの方から
喜んで落ちるっていうわけだ。次によく起こることは、わかるだろう、
他の男たちがその娘っ子たちを拾っていくということだ。

オリヴァー まさにその通り。実によくあることだ。でも、おい、若旦那は口

2 第1場の登場人物と第2場以降の登場人物の関係は曖昧である。レヴェルズ・ブレイズ版の解説は、この場面についての様々な見解を紹介している（Cawley and Gaines, 13-15）。

ンドンからまだ戻ってないのか？ それに仲間のサムも？

ラーフ 売春宿のピューリタンの女将みたいに言うに「いずれもそうではなし」だ。（舞台裏で騒しい音）おいサムのようにだぞ、サムが帰ってきた。なんて遅いんだ。いや本当に土産話が聞きたくて鼻がうずうずする。

オリヴァー 俺の肘は警戒心でうずうずする。

サム （舞台裏から）どこにいるんだ？（サム登場、舞台裏に向かって）おい、注意して馬を歩かせるんだぞ。ずいぶん走らせて、奴は汗だくだから。もし奴が風邪でも引いて咳こんだりしたら、俺がひどい目にあってしまうだろう？ おお、ラーフとオリヴァーじゃないか！

ラーフ、オリヴァー 正直者のサム、よく帰ってきた！ どんなものをロンドンから持って帰ってきた？

（サムはロンドンで手に入れたものを身に付けている。）

サム ほら俺は流行のかたまりだ。帽子三つ、その上に載っているのが二つの鏡、胸には襟立て用ワイヤー二つ、脇には旅行鞆、背中にはブラシ、ポケットには暦、そして股袋にはバラッドが三つだ。まったく、これが世間の使用人の真の姿だぜ。

オリヴァー きっとお前はそうだろうよ。その気になったらお前は成功するだろうよ。もっと少ない道具でうまくいく奴らもたくさんいる。俺にはわかるが、そういう奴らは死ぬ前にはきっと金持ちになっている。でもサム、ロンドンの様子はどうだった？

ラーフ そうそう、おい、ロンドンの様子はどうだった？ 若奥さんは愛する人が帰ってこないって、ずいぶん愚痴ってたんだぜ。

サム ええっ？ それは馬鹿なことだ、いや、まったく間抜けだ。

オリヴァー どうして？ サム、一体どうして？

サム なぜって、御主人はうんと前に結婚しちゃったからさ。

ラルフ、オリヴァー まったく冗談言いやがって。

サム ええっ、今まで知らなかったのか？ 彼は結婚して、奥さんに打ちこんで、二、三人の子持ちだぜ。なぜって、女は打たれれば打たれるほど、耐えて子を産むからな³。

ラーフ ああ、その通りだ。女は打撃に耐えるからなあ。

オリヴァー おいサム、俺は二年分の給料を引き換えにしてでも、若奥さんにはそのことを知ってほしくないよ。きっとおかしくなって元には戻らなくなっちゃうだろう。

サム 思うに、奥さんは寢所で祝福されていたってわけさ、彼はベッドには来やしなかったんだから。ああ、彼は全部浪費し、土地全てを抵当に入れ、大学にいる弟に借金の肩代わりの判を押させた。代書屋に稼がせてな。ああ、彼は財産よりも大きな額の借金をしたんだ。

オリヴァー まさか！

サム ああ、さらに言うとな、人が身分の低い女をモルとかドルと呼ぶみたいに、彼は奥さんを売女って呼び、子供たちを当然のように私生児と呼んでいる。おや、これはなんだ？ 何か俺のズボンを押し下げているぞ。二本の襟用棒のことをすっかり忘れていた。これもロンドンから持ち帰ったんだ。最近、ロンドンの物はどんな物でもここじゃ高級品ってわけさ。

オリヴァー ああ、遠くから来た物だからな。

サム だがな、本当のことを言うと、実際、この田舎でも、火で熱したら十分使える襟用棒があるよな。まあ、ものは考えようだからな。うん、ものは考えようだ。でもって、さっきお前が言ったように、貴婦人にとって最高のものは、いつも遠くから来るものだからな。

オリヴァー ああ、それにお付きの侍女連中にとってもな。

3 “bear”を「出産する」「耐える」の二重の意味に使った言葉遊び。この箇所は劇本体の「夫」の暴力の伏線にもなっている。

サム　　ところで、おいラーフ、今度の雷で村のビールはもう酸っぱくなっちまったか？⁴

オリヴァー　いやいや、まだ大丈夫そうだ。

サム　　それじゃあ、俺の後についてきな。最高に酔っぱらう心持ちを教えるよ。先週ロンドンで知ったんだ。

ラーフ、オリヴァー　ああ、教えてくれ、教えてくれ。

サム　　その素晴らしい心持ちで酔っぱらうと身体にいいらしいぜ。ロンドンじゃ「騎士叙任式」って呼んでるんだ。なにせみんな膝をついて飲むのさ。

ラーフ、オリヴァー　本当にそりゃ凄いな。

サム　　さあ、俺についてきな。俺がきちんと爵位を授けるように飲ませてやろう⁵。（退場）

第2場

（妻登場）

妻　　私たちどうなるのかしら？ 全てなくなってしまうわ。

夫は浪費を止めないから

彼の信用も家産も、両方とも費えてしまいそうだわ。

放蕩者から生まれた子供は乞食になるしかないことは、

神様がお定めになっていらっしゃるわ。

これが若い時に有望に見えた男の人の美徳かしら？

賭け事、放蕩三昧の宴会、真夜中の大騒ぎ、

そして暴飲暴食で食傷してベッドに入るなんて

4 雷はビールを酸っぱくすると信じられていた。

5 原文では「爵位」は“degrees”であり、酔いの段階と位階との両方を指す言葉遊びである。

あの人の家の榮譽も名声も形無しだわ！
 それに、これだけじゃない、私を一番苦しめるのは。
 彼が幾ら損したとか、幾ら儲けたとか嘘をついて、
 事態の深刻さを全く考えてないで、
 悔い改めているというよりもほとんど狂っているということ。
 彼の財産は出費に追いついていない。
 彼は不機嫌に腕組みをして座り、
 天が御照覧だということを忘れてるわ、
 それが本当に恐ろしくて、私の心を怯えさせるの。
 魂が地面に落ちたみたいに、重々しい足取りで歩いている。
 過去の数々の罪を後悔せずに、
 むしろそれらを長続きさせることができなかったことを悔やんでいる
 わ。

恐ろしい憂鬱と、神をも恐れぬ悲しみ。
 ああ、あそこに彼がやってくる。不機嫌みたいだけど、
 話かけてみましょう、そして話を聞いてあげて
 心から憂鬱を追い出してあげましょう。（夫登場）

夫 畜生、最後のサイコロの一投で失敗した！ お陰で、
エンジェル
 天使⁶を五百枚もすっちゃまった。
 畜生、畜生。天使に見限られた。
 くそ、本当にそうだ、だってこの世でビター文も
 持っていない奴は呪われているってことだ。もう駄目だ、もう駄目だ。
 妻 ねえあなた。

6 エンジェル金貨は1470年にエドワード4世が初めて鑄造し、1634年まで使用された。大天使ミカエルが竜を退治している姿が刻印されていたのでこう呼ばれる。当時6シリング8ペンスから10シリングほどの価値があった。

- 夫 ああ最悪の罰だ、俺には妻がいた！
- 妻 どうかお願いします、
どうぞ貴方のご不満の原因を教えてください。
- 夫 仕返しにお前が素っ裸になればいいんだ！ お前こそがその原因で、
結果で、本質で、特質なんだ！ お前、お前、お前が！ （退場）
- 妻 より悪くなってしまったわ。心が飢えているんだわ、
体が飢えるみたいに。何か悪霊が
彼の体に取り憑いたみたいで、昔の彼のようにじゃない。
（夫、再び登場）彼がまた来た。
彼は私が原因だっていうけれど、私は
敬意と愛の言葉以外は喋ったことはないわ。
- 夫 もしも結婚が神聖なものなら、それなら姦通も神聖なものだな。だって
姦通は結婚なしでは出来ないからな。馬鹿だった！ 俺は結婚して
乞食を生んだとはどういう料簡だったんだろう？ ああ俺の長男は悪
党か何かになっちまうだろう。奴は楽には生活していけない、だって
地代を得る土地がなくなるだろうから。あの抵当が俺の遺産に轡のは
みのように食い込んで、それで俺はその鉄棒をくわえないといけない
んだ。俺の次男はタレこみ屋に、三男は泥棒か、さもなきゃ女衒、つ
まり奴隷みたいなボン引きになっちまうだろう。
ああ、貧しさよ、貧しさよ、お前はいかに酷く人を扱うことか！
悪魔でさえも女衒になることを軽蔑するだろう。
悪魔は、もっと誇りがあって、自分の信用にもっと気をつけている。
ああ、卑しく、卑劣で、惨めで、不潔な貧困よ！
- 妻 あなた、心からのお願いです、
あなたの不満の本当の訳を教えてください。
- 夫 金、金、金だ。だからお前が金をくれ。
- 妻 ああ、私はあなたのその不満の原因ではないけれど、

私の物は、指輪だって宝石だって、
あなたの好きなように使ってください。でもお願い、
あなたは高貴な生まれの紳士なのですから、
私を軽蔑するにせよ、
あの三人の可愛い息子たちのことを考えてください、
あなたが父親なのですから。

夫 うえッ！ 私生児だ、私生児だ、
ペテンだ、ペテンで生まれてきた私生児だ！
妻 神様はその言葉がいかになんか分かっていらっしゃるわ。だけど
もっと沢山悲しみがあるのだから、そんなことは我慢しましょう。
ああ、思い出して、あなたの土地は既に抵当に入っていて、
あなた自身、借金を負っていて、あなたの弟は
大学で学ぶ前途有望な学生なのに、借金の保証人になっているから、
きっと彼も投獄されることになるわ。そして――

夫 もう十分だ、この売女！
慣習を重んじて結婚してしまったが
我慢できん。お前は自分の話で俺の楽しみを
終らせることが出来ると思っているのか。お前の友人にでも頼んだら
どうだ。
お前とお前の私生児どもが乞いせがんでも、俺は自分の態度を
少しも変えはしないぞ。「真夜中」よ、俺はいつもお前を愛し、
お前と共に大騒ぎするぞ。抑えるって？
どんな連中にも
俺が習慣を破り、出費を抑えるって言わなければいけないのか？
いいや、お前の宝石を自由に使ってやる、
俺の財産がもっと豊かにあった時のようにな。
妻 じゃあそうしてください。

- 夫 俺は本気だぞ、真面目に聞け、（彼女を蹴りつける）
俺は永遠にお前を軽蔑して
ベッドのお前にも決して近づかんぞ、
ベッドの中で離婚だ、
お前が嫁入りの財産を売り払って、
俺が最も好きな遊びをまた楽しめるようにお前が同意するまではな。
- 妻 あなた、もっと優しくしてください。
そうすれば、法律が許すことなら
何でもあなたの言うことを聞きます。
- 夫 じゃあ嫁入り道具を差し出せ。俺が金欠で（ポケットに手を入れる）
奴隷のように、突っ込んでいる手と
爪以外、ポケットが空っぽなんて。
ああ、こんなことは俺の血筋には相応しくない。さあ金を渡すんだ。
俺は単に遊びを傍観しているような人間じゃないんだ。
博打の人集めだけなんて！ 俺は愛しいサイコロを自分で振り、
儲けを産ませるんだ。おい、ちゃんと嫁入り道具を売るんだぞ。
- 妻 では失礼して、そのようにします。
- 夫 急げ、急げ。（妻退場）
あいつを妻にしたなんて、忌々しい。厄介だ、厄介だ。しかも三人の
子供が三人の悪魔のように俺にとりついていやがる。くそっ、くそっ、
くそっ、売女め、私生児め、売女め、私生児め！
（これを聞いていた3人の紳士登場）
- 紳士1 あなたの舌はとても酷い考えによって耳障りな音を立てています。
奥さんの名誉を汚すなんて、
あなたは高貴な生まれの人なのに。気違いと呼ばれる人は
他人を危険に晒しますが、もっとひどい気違いは
自分を傷つけ、その言葉が不当な醜聞をもたらして評判を汚すのです。

それはよくありません。どうかお止めください。

紳士2 ご主人、謙虚になって行いを正してください。

紳士3 誠実で優しい気持ちをお忘れにならないように。

夫 さようなら、どうもありがとう、元気でな、会えてよかったよ、
命令よ、助言よ、さらばだ。

(紳士たち退場、召使登場)

夫 どうした、おい、何の用だ。

召使 お知らせします。奥様は、奥様をロンドンにお連れするように、御主人様の管財人である伯父上の御指示でやってきた者たちと会われています。

夫 じゃあ、あいつはここを発つわけだな。お前もそうするがよい。
でも、あいつも承知のあのことを忘れるなど言っておけ。
さもないと、この家より地獄がもっと快適ということになるからな。

(召使い退場、紳士4 登場)

紳士4 今が、あなたと話す良い時機であろうとなかろうと構いません。

夫 俺もだ。

紳士4 私はあなたに注意するために来たのです。

夫 誰を？ 俺だって？ 注意だって？ じゃあやってみな。でもあまり俺の心を刺激するなよ。なぜって、俺を注意して怒らせたら、お前を殴ってやるからな。

紳士4 お前自身の愚行を殴るがよい。というのも
それこそ殴られるに値するからだ。今は人目がなく、
ここには私たちしかいない。だから言うがお前は馬鹿で意地張りで
不潔な放蕩者で、お前の土地と信用は
今、共に消滅の危機に瀕している。
お前のために残念に思う。恥も知らずに浪費する者は
富とともに名声も失う、

そしてそれがお前だ。

夫 止めてくれ。

紳士 4 いや、私の話をもっと聴け。

お前の父の、そして先祖の令名は
この地方の記念の碑であり、我々にとって恩寵だったが、
お前の愚行が今それに泥を塗っているのだ。
お前の若さの「春」は友人たちに
実りの多い「夏」を約束していたので、
お前が酷い「飢饉」に陥るなど、
誰の頭も想像出来なかった。我々がこれを目にして、
信じなければならぬとは残念だ。お前の変わり様に対する
このような意見が至るところで投げかけられるだろう。
お前と悪魔が世界を欺いたのだ。

夫 我慢ならん。

紳士 4 中でも最悪のことは
美德に溢れ、誉れ高く、味方である奥さんを
売春婦などと罵ったことだ。

夫 ああ、それでお前のことが判ったぞ。
お前は、あの女の弁護人で、秘密の愛人で
ぐるなんだな。

紳士 4 ああ、何と愚かな考えだ。
堪忍袋の緒が切れた。私の評判に泥が塗られるのを
何もせず、放っておくとも思っているのか。

夫 図星で腹を立てたな、そうだろう？

紳士 4 いや化け物め、私の思いは
徳から発した思いやりだけということを証明してやる。

夫 彼女の徳を思いやるだと？ 語るに落ちたな。

- 紳士 4 下劣な奴め、
お前がベッドを共にして、名誉ある実りをもうけた人に
憎しみを向けるとは。 （二人は争い、夫が負傷する）
- 夫 ああ。
- 紳士 4 まだ降参しないか？
- 夫 まだあなたとの戦いは終わっていない。
- 紳士 4 その通りだ、まだこれからだ。 （再び争う）
- 夫 何か魔術でも使っているのか？
お前は俺に詐術をかけているのか？
- 紳士 4 いや、正々堂々とやっている。
真実のために戦う者には詐術など不要だ。 （夫倒れる）
- 夫 運がなかった。俺は地面に倒れたのか？
- 紳士 4 さあ、慈悲を乞うのです⁷。
- 夫 ああ、酷い奴だ。
- 紳士 4 ああ、この様に憎しみは我々を墓へと導こうとするのですね。
お分かりのように私の剣はあなたの血を求めてはいない、
あなたのお怪我を、私はあなた以上に残念に思っているのです。
徳高い家のご出身なのですから、徳高い行動を見せてください。
血を流しているのはあなたの名誉ではなく、あなたの愚行なのです。
あなたにはたくさんの善いことが期待されてきたのだから
多くの人の期待を裏切らないでください。あなたには
善良で従順な奥さんがいます。その奥さんと子供たちに
不名誉を与えてはいけません。罪のみを悔やみ、
このように倒れたことで、二度と倒れないように立ち上がるのです。

7 原文では、戦いが終わると、カジュアルな二人称の“thou”は、よりフォーマルな二人称の“you”に変化している。

では私はこれで。 (退場)

夫
あの犬め、行っちゃったか、
その牙で俺を刺した後で。ああ、俺の心は
奴に飛びかかってやりたいくらいだ。そうだ、復讐だ、
復讐せずには気が済まない。売女の妻よ、
お前の愚痴が、こんな風に俺の身体を切り裂いて
胸から血を流させたのだ。でもお前にも血を流させてやる。
負けたって？ 倒れたって？ 口もきけないって？
金欠になると必ず身体の力は抜けるものだ。
ああ、それで俺は負けたんだ。それでなきゃ俺が倒されるはずはない。
(退場)

第3場

(妻が乗馬用衣装で、召使と登場)

召使 ああ本当に、奥様、こんなことを申し上げると
差し出がましいかもしれませんが、御主人様の狼藉を御存知でしょう、
あの方をお許しになる理由はございませんよ。

妻 実はあるのですよ、でも、ああ、
家の中の過ちが外にまで知られるなんて。
家の中だけでも十分に悲しいことなのに。一目で
伯父は夫の放蕩生活を見抜くことができたのです
完全に。真剣な目で
彼の愚行を全て数えあげたみたいに。
伯父は夫の土地が抵当に入っていること、身内が保証人であること、
夫が借金で首が回らないことが分かったのです。そんな時に、
もし私が更に彼の酷い行いを付け加えようものなら、
伯父はあの人の善さをまったく考えられなくなってしまったでしょう。

今は若さにまかせて放蕩を尽くしているけれど、
 時間が経って経験を積み、柔らかくなって放蕩を振り捨てて、
 優しさを私に向けてくれるでしょう（なぜなら私に出来る
 様々な工夫で彼を穏やかにしたことがあるからです）、
 彼の今の悪徳は、まだ形が整わない幼い熊よりも醜いのですが⁸。
 伯父は彼を推薦して宮廷での役職や地位につける用意があります。
 彼の下向きの人生を
 確実に救ってくれるでしょう。この方法で
 私たちが新たに結びついて、彼が美德と土地を
 取り戻すことができればよいのだけど。

召使 奥様、私もそのように思います。もしこれで御主人があなたに優しく
 ならず、愛することも、あなたを大切に思うこともなければ、悪魔が
 彼の中に堂々と巢食っているとしか思えません。

妻 きっとそうしてくれると私は信じ、疑っていません。さあ行って頂戴、
 あれは夫がこっちに来る音だわ。

召使 それでは失礼します。（退場）

妻 私はこの素晴らしい方法で私の子供たちを守り、
 夫を高利貸しの手から救いだせるわ。
 もう何も売り払う必要はない。伯父さんは優しい人だわ。
 これできっと夫は満足してくれる。

あ、あの人がやってきた。（夫登場）

夫 おい、帰ったのか。金はどこだ。金を見せろ。がらくたとか、お前の

8 幼くて形が整っていない熊は母熊に舐められて形が整うとプリニウス（*Naturalis Historia* viii 54）が書いている。17世紀にはこうした考えは誤りであると判っていたが、諺としては生き続けた。（Paul Hammond and David Hopkins, eds., *The Poems of John Dryden*, vol. 3 (Longman, 2000), p. 50 n.)

土地は売ったのか？ さあ、金はどこだ。さあここに出せ、出せ、さあ、ざざっと出すんだ、ざざっと。地面にざざっと出せって言ってるんだよ。見せろ。見せろ。

妻 あなた、ちょっと我慢して聞いてください。今から言うことを気に入ってくれると思っているのだけど。

嫁入りの財産よりもあなたにもっと良いものがあったのです。

夫 はっ！ 何だそれは？

妻 お願いですから怖がらせないで聞いてください。あなたが私に優しく、温かく接してくれていることを伯父に知らせたところ、伯父は喜んでくれました。そして、あなたの落ち目の境遇を哀れに思い、あなたに給金も高く名誉もある宮廷の地位を世話してくれたのです。それで私はすごく喜んでいるのです。

夫 いいかげんにしろ、このこそ泥、すごく、すごく喜んでいるだと、俺が苦しんでいるのに！（彼女を蹴る）この狡猾な売女め、九人の悪魔よりも悪賢いな、伯父さんを訪ねたのは、俺の話をするためだったのか、俺の状況やら、境遇やらを話すためだったのか。遊びを楽しんでいた俺が今や、宮仕えに縛られて、へいこらす老人みたいに、ぺこぺこしたり、気をつけの姿勢をとらなければならないのか、しかも帽子を脱いで。教会でも帽子を脱いで頭を見せることを決して良しとしないこの俺が？ 卑しい女め、お前が不平を言ったからこういう結果になったんだ。

妻 ああ天が御存じです、
不平どころか褒め言葉だったことを、そして私があなたとあなたの境遇について最高に優しい言葉を尽くしたことを。
あなたの土地が抵当に入っていることや、
これまでのことを知っているのは私の友人たちだけです。
もし私が嫁入りの財産を守ろうとしていると

疑ったり、私や可哀そうな子供たちの利益のためだけを考えていると思うなら（といっても、こういうことは子供の安心を願う母親の当然の配慮ですが）、あなたの怒りを宥めるために私は最善を尽くします。嫁入りの財産を使ってください、あなたの遊びが必要とするだけ、私の望みはただ一つ、慈悲の心があるのなら、私に優しい面持ちを見せ、丁寧な言葉をかけてください。

夫 金だ、売女、金だ、さもないと俺は——（短剣を抜く。召使が急いで登場。召使に向かって）おい何だ？ どうした？ お前のその急ぎの知らせを言え！

召使 （怖がりながら）どうか御主人様——

夫 なんだ？ 自分の短剣を眺めていたらいけないのか？ 悪党、さっさと言え。さもないとこの剣先をお前に向けるぞ。早く、さあ。

召使 御主人様、大学からお見えの紳士が階下にいらっしゃっていて、話しをしたいとのことですよ。

夫 大学からだ、大学、なんて言葉だ、虫酸が走る。（夫と召使退場）
妻 （舞台に一人になり）こんなにも惨めな扱いを受けた妻がこれまでに何かしら？

もしもこの知らせが飛び込んでこなかったら、あの剣先は私の胸に突き刺さっていたことでしょう。
ここにあるのは、
世の女性が惨めと呼ぶ程度のものではないわ。
私の惨めな状況はそんなものではない。
結婚している全ての女性と惨めさで比べ合いをしたいぐらいだわ。
何をしても彼は喜ばず、全てが無に帰してしまう。
薦められた宮廷での仕事を奴隷の仕事と言い、
名誉ある役職を卑しい隷属と言うなんて。

私と子供たちはどうになってしまうのかしら。

家にいる二人と、乳母の許にいる一人、あの可愛い子供たちはどうなるの。

私には分かるのです、「破滅」がバクチ打ちのように手を振って古くからの土地を塵にしようとしていることが。

臉が、重い悲しみで、涙で湿った眼に

覆いかぶさってきた。もう殆んど目が見えない。

こんな風に悲しみは続くのだわ、私を目覚めさせ、そして眠らせる。

（退場）

第4場

（夫が大学の学寮長と登場）

夫 どうぞこちらにおいでください。よくいらっしゃいました。

学寮長 本当ですか。歓迎されないのではないかと思いましたが。

夫 歓迎しますよ、どんな御用件でも。

学寮長 長々と前置きをするのは私のやり方ではないので、単刀直入に要点を言います。やって来たのは、嘆かわしく悲しい理由からです。前途有望な若い紳士である弟さんですが、私たちは皆、彼の能力をとっても高く評価しています。その彼が、あなたの支払い不履行や異常な怠慢のために、借金の連帯保証人になっており、捕われの身で、彼の勉学が完全に邪魔され、希望も死んだようなのです。彼の若い気概はこのような抑圧の暗雲に覆われているのです。

夫 ふむふむ。

学寮長 ああ、あなたは我々の大学の、最も大きな希望の星を殺したのですよ。懺悔し償わなければ、すぐに重い罰があなたに下ることでしょう。あなたの弟さんは神学で功績をあげて、沢山の人の魂が天国へと向かうように手助けしたでしょうが、あなたの軽率な行いから今は監獄に収

監されているのです。あなたはこの報いを受けなければならないし、御自分の魂にこの状況の深刻さをしっかり言い聞かせなければなりません。

夫 ああ、大変だ！ ああ！

学寮長 賢い人たちはあなたを悪人だと思っていますし、また実際にあなたの悪口を言っている人もいます。誰もあなたを愛していません。それどころか「誠実さ」が非難するような人たちでさえ、あなたを非難しています。これは弟さんへの心からの愛情から申し上げるのですが、彼を釈放させるまでは、幸福な時間、至福の思い、静かな眠り、楽しい散歩、その他、人を満足させるものなど決して求めてはいけません。さあ、あなたは何をしますか？ 彼をどうしますか、絶望的な悲惨それとも明るい希望を与えますか？ お答えをいただけるまで我慢してここで待ちます。

夫 先生、あなたの言い分は私にはこたえました。魂にこたえました。あなたは説得にかけては一流だ。今ようやく分かりました。あなたの言葉は私を二つに裂きました。あなたのお言葉と御苦勞に感謝します。わたしは、弟に対して、悲惨で、ひどい、ひどい悪行をおこなったことを認めざるを得ません。（呼ぶ）おい、誰か！（召使登場）

召使 はい。

夫 ワインを持ってきてくれ。（召使い、ワインを取りに退場）

ああ、可哀そうな弟、

私のために逮捕され苦しむとは！

学寮長 多くの人はこのような苦しみ悩まされるものです、墓に入るまでは。（召使、ワインを持って登場）

夫 乾杯しましょう！ あなたをきちんとお迎えしておりませんでした。

学寮長 あなたのためにもっと楽しい訪問であつたらよかったのですが。乾杯しましょう、あなたと、牢獄にいる優しい人のために。

夫 そうしましょう。（二人飲む）

さて、よろしければ、

家の敷地をしばらく散歩されませんか？

ここにいる召使いがお供します。終わる頃にはきっと十分なお答えができるでしょう、弟を完全に満足させるようなお答えが。

学寮長 それに対しては、天使も喜び、

世間の噂も治まるでしょう。そうなれば私は

良い日にここに来たとと言えるでしょう。（召使いと一緒に退場）

夫 ああ、破滅した男よ、お前の歓楽の罪がお前を墮落させた、お前の墮落がお前を貧乏にしたのだ！ 天は罪を犯してはならないというが、にも拘らず女をお創りになった！ 天は我々の五感に悦びへの道を見つけさせるが、悦びは、見つけられると、我々に道を誤らせる。こういうことで身を減ばすなんてどうして我々は知りえようか？ ああ、美德が禁じられていたら！ そうなれば、我々はあらゆる美德を試すだろう。というのも禁じられているものを愛するのは我々の本性だからだ。過度の飲酒が悪とされていなかったら、誰が獣のように馬鹿な行為を行い、泥の中の豚のような愚行をするだろうか？ 小さな円卓の上で、三振りで9000 エーカーを賭けさせるなんて一体サイコロに何があるというのだ、紳士たる者の震える手が、その子孫を振り落として盗賊や乞食にするなんて。もう取り返しはつかない、やってしまったのだ、ああ悲惨なこの貧しさ。資産は十分に残されていた、そう、十分に。俺の土地は満月のようなようだった、しかし今や月は新月に近く、どんどん欠けていく。あの月が俺の物、俺の物だったなんて、父の物、そして、代々に亘って先祖の物だったと考えると気が狂いそう。この家がどんどん沈んでいく。今や家名は乞食のようだ。何百年もこの地方を知らしめるほどの名声を誇った、この家名が俺に再興せよと乞うてくる。ああ、この俺に。俺の子孫はここで絶えるのだ。こ

の家族は、俺の他に五人が惨めになっている。俺の放蕩ゆえに、弟は投獄され、妻はため息をつき、俺の三人の息子は貧困に陥り、俺は破滅した。（髪をかきむしる）

なぜ髪は、この呪われた頭にまだ生えているのだ？

この放蕩という毒で髪は抜け落ちないのか？ ああ、弟は
邪悪な奴らと牢獄にいて、

半殺しにされ、不当な扱いを受けているのに、財産のない俺は
生活することも、弟を助けだすこともできない。

聖職者や、死にかけの人間は地獄について語るが

俺の心は地獄の苦しみで一杯だ、

隷属と困窮で。俺のような状況では誰が

魂を担保に金を借りずにいられるだろうか？

救済を質に入れ、利息で生きていくことを誰が選ばないだろうか？

俺は、かつて豊かに暮らしていた――

俺にとって貧窮は地獄の苦しみよりも辛い。

（彼の息子がコマと鞭を持って入場）

息子 お父さん、体でも悪いの？ どうしたの？ そんな風にしていたら僕が
コマを廻せないよ。お父さんがそんな風に足を広げて立って場所取っ
てるから。もう、そんな風にしても怖くないよ。僕はしかめ面もホブ
ゴプリンのお化けも怖くないもん。

（夫は片手で息子の長いコートの裾をつかみ、もう片方の手で短
剣を抜く。）

夫 さあ、行くぞ。ここにはもうお前が引き継ぐ財産などない。

息子 え、何するの、お父さん？ お父さん僕を愛^{あい}してるんでしょ？

夫 （刺す）いや、害^{がい}してやる。どうだ！

息子 お父さん、痛い！

夫 俺の長男の乞食よ、お前にはさせたくないのだ、高利貸しから金を借

りる暮らしだとか、立派な人の門口で嘆いたり、「旦那様」と言っておこぺこするなんてことを。そう、お前の弟にもだ。こうしてお前の頭を殴るのは慈悲の心からだ。

息子 こんなに頭を殴られたら、そんなことわけがわからなくなっちゃうよ。

夫 (息子を刺す) 乞食になるぐらいなら、血を流せ、流すんだ。お前の名前を汚してはいけないのだ。

財産が少ないなら、乞食をするより、そんな物は蹴飛ばしてしまえ。

さあお前の弟の所に行こう。運命の神々よ、息子の血を

お前たちの顔へと跳ね飛ばしてやる。そうすればわかるだろう、

どんなに強く俺たちが貧窮を蔑むかを。(息子を抱えて退場)

第5場

(女中が腕に子供を抱いて登場。妻は彼女のそばで眠っている。)

女中 お眠り、かわいい赤ちゃん。お前のお母さんも悲しみゆえに眠っているわ。

ちょっとした良い兆しね、悲しみがこんなに深く眠りに誘うのは。

静かにお眠り、かわいい子。お前の将来の見込みがもっとよければよかったのだけど。

かつて栄誉が手にしたのは、サイコロ博打で失われてしまった。

つらいものね、父親が子供を手放すほど遊んでしまうなんて。

悲惨さだけがこの家にある。

そして破滅と荒廃が――、(血を流す子供を抱え、夫入場) あ！

夫 この売女、その子をよこせ。(子供をめぐり女中ともみ合いになる)

女中 ああ、助けて、助けて、ああ、人殺し、人殺し！

夫 このゴシップ好きの、おしゃべりの、怪力売女め、

お前の首を折り、わめき声を止めてやる。一階へ突き落としてやる。

真っ逆さまに転がり落ちろ！ (彼女を突き落とす)

さあ、女の舌を黙らせる確かな魔法は
首をへし折ることだ。ある政治家が前にやったことだがな。

息子 お母さん、お母さん、僕、殺されちゃったよ、お母さん！

(妻は起きる)

妻 え、いま誰が叫んだの？ ああ、私の子供たち！二人とも、
二人とも血まみれになって！ (次男を抱きしめる)

夫 この売春婦め、その子を、その乞食を放せ。

妻 ああ愛しいあなた！

夫 この汚い売女め！

妻 ああ、あなた、あなた何をなさるの？

夫 その私生児を俺に渡せ。

妻 あなたのかわいい息子よ。

夫 私生児どもが多すぎるのだ。

妻 優しいあなた。

夫 お前は俺を邪魔するのか。

妻 ああ神さま。

夫 (彼女の腕の中の子供を刺す) これでも食らえ。

妻 ああ私の、かわいい子が！

夫 (その子を取り上げて) くそガキ、お前を生きのびさせて、この家に
恥をかかせるわけにはいかない。

妻 ああ神さま。 (彼女は傷付けられて倒れこむ)

夫 死ね、行っちまえ。

世の中に売春婦は多すぎるが、貧困がお前をそこに加えるのだ。

(逞しい召使い入場)

召使 ああ御主人様、これは一体何事ですか？

夫 卑しい奴隷、俺の召使い、

お前は怒っている俺の前へやってきて、俺に意見する気だな？

召使 たとえあなたが悪魔でも、あなたを止めてみせます、御主人様。

夫 止めるだと？ 生意気な奴め、破滅させてやる。

召使 ああ、あなたはもう私たちみんなを破滅させています。

夫 お前は主人と戦う気か？

召使 化け物と戦おうとしているのです。

夫 俺には力がないのか？ 自分の奴隷に足枷をはめられるのか？

召使 いいえ、悪魔と戦うのだから、私は負けるでしょう。

夫 この悪党め、お前の相手をしてやる。 （彼を倒す）

さあぼろぼろにしてやる。

召使のお前を鞭打ち、殴り、踏みつけてやる。

さあこれで俺をすぐには追いかけてくることはできないだろう。

馬には鞍が付いていて出発の準備はできている。さあ行くぞ、

乳母の許にいるガキのもとへ、あの乳飲み子の乞食のもとへ。

運命の神々よ、俺の子供は一人としてお前に踏みつけさせはしないぞ。

（学寮長と出くわす）

学寮長 どうしたのですか、御主人？ ずいぶん取り乱された御様子ですが。

夫 私がですか？ 思い違いをされている。

さあ、中にお入りください、安心していただけるお話がありますので。

借金を全額返済するためには、ほんの少し足りないだけなのです。

これができれば、弟は満足できる状態になるでしょう。

学寮長 そうなれば嬉しいですね。では御主人、お伴しましょう。

（二人退場）

召使 ああ思うように立ち上がれない。

悪魔のような力で殴り倒され

血に飢えたような勢いで体をぼろぼろにされてしまった。

これまで優しい人だったのに、

今や地獄の力を手にして、自分の魂を傷つけている。

ああ、地獄落ちがいかに弱い人間を強くすることか！

（学寮長と召使二人登場）

召使 ああ、あなたがいらしてから、最も酷い事が起こってしまいました！

学寮長 傷を負いながらの挨拶とは！ 彼はこんな清算をしたのか、
これが弟を喜ばせることなのか？ ここにも倒れている人が。
血を流している子供たちのそばには母親が死んでいる。

妻 ああ、ああ！

学寮長 医者、医者、医者！ 息を吹き返したぞ。

召使は血まみれになって気絶している。

召使 追いかけて下さい。家族を殺した主人は馬に乗って
乳母の家にいる子供を殺しに向かいました。急ぎ追いかけて下さい！

学寮長 すぐに行こう。町中に知らせ、
彼を止めるのが私の仕事だ。

召使 さあ行って下さい。 （学寮長と召使二人退場）

妻 ああ、私の子供たち！

召使 奥様、傷が深そうですが、大丈夫ですか。

妻 なぜ息を吹き返してしまったの？ 生きのびて
子供が目の前で血を流しているのを見るなんて。
この光景を見ると母の心は死んでしまいます、
処刑人がいなくとも。ああ、お前も襲われたの？

召使 俊敏な悪事を止めようと、
とっさに行動して彼に挑みました。
争いましたが、彼よりも、何か邪悪な力のせいで
私は負けたのです。それから彼は私を殴り、
体を傷つけ、髪を引きむしったのです、
激情に駆られた人のように。
起き上がって追いかけるられないように私を傷つけました。

妻 一体どうして彼は美德を失い、
心からは優しさを失い、
子供を殺し、妻も殺そうとし、
召使に重傷を負わせたのでしょうか？

（二人の召使登場）

召使 2 人 どうかこの呪われた場所からお移りください。

奥に医者がお待ちしております。

妻 では行きましょう。

この場所が愛しい血を流させたのです、無実の血を。

「殺害」がこの部屋を両手で掴んだのです。

決してこの汚れは消えないでしょう、この家がここにある以上。

（全員退場）

第 6 場⁹

（夫、馬から投げ出されながら登場し倒れる。）

夫 ああこの駄馬め、躓きやがって、骨の肥大症に罹ってしまえ。
病気だらけになって、走れなくなってしまう！
ああ、俺は打撲で痛くてしょうがない。疫病でびっこになってしまえ、
気ままに呑気に走りやがって。ちくしょう、
町から近いこんなに平らな場所で
俺を投げ出すなんて！ くそっ、
サイコロ投げで負ければ土地だって投げ出す羽目になる。
いまいまい獣め！

（舞台奥で「追いかける、追いかける」という叫び声。）

9 ここで場面は初めて戸外へと移る。「夫」が捕えられるだけでなく、閉塞感を幾分か和らげる効果もある。

あっ！「悪党だ、追いかける」¹⁰ のような声が聞こえる。
立つんだ、立つんだ、お前の馬に乗るんだ、急ぐんだ、
あの子供の乞食を片づけければ、そうすれば全て終わりだ。

（舞台奥で「さあ、こっちだ、こっちだ！」という叫び声。）
すぐそこまで来ているのか？ ああ、
何という運命だろう、手足がいうことを聞かず、俺は歩けない、
俺の意思も弱って来た、貧乏神のせいだ。
ああ、ここからあの子の心臓に達することが出来れば！
（学寮長と三人の紳士、矛槍をもった者たちが登場。彼を見つける。）

全員 こっちだ、こっちだ、あそこだ、あそこだ。

学寮長 自然の道に背いている、冷酷だ、野蛮を超えている。
スキタイ人が、大理石のように冷酷な心と容赦のない性格から
行動する時でさえ、お前のこの行為よりも
残忍な行為は出来ないだろう。
これが長い間待っていた私への答えなのか？
牢獄に囚われているお前の弟はこれで満足するのか？

夫 我々が弟に残せるものは皮膚の他にはない。
ただ引き剥がせばいいのだ。

紳士 1 大罪が彼を恥知らずにした。

学寮長 彼は多くの血を流したので、赤面する血さえもないのだ。

紳士 2 連れていけ、判事のところへ連れていけ。

10 原文は hue and cry。これは、「叫喚追跡。往時のイングランドで、警察担当の役人ないし私人が felon（重罪犯人）を発見した場合 warrant（令状）なしで地方住民とともに角笛を吹き喚声をあげ追跡逮捕したコモン・ロー上の手続き。」田中英夫編『英米法辞典』（東京大学出版会、1991年）、419頁。

身分の高い紳士が近くに住んでおられる。

そこで奴の悪行は明らかにされるだろう。

夫

ああ、願ったりだ、

俺のした事が知られるとは光栄だ、

子供一人を手にし損なったこと以外、嘆くことはない。

学寮長 そんなことを嘆くなんて父親の情がないことか。

連れていけ。 (全員退場)

第7場

(二、三人の従者とともに騎士登場。)

騎士 妻の命を奪おうとしたのか？ 子供たちを殺したのか？

紳士4 そのようです。

騎士

彼を知っているから、残念に思う。

今のこの暗い瞬間まで、汚点一つ無く、

名誉ある家柄の、素晴らしい血筋の者として

生きてきたのに。

紳士4 ここへやって来ました。

(学寮長やその他の者が、捕えられた夫と登場。)

騎士

家の蛇め！

こんな事件の判事をする事になるとは残念だ。

学寮長 どうか――

騎士

もう説明の必要はありません。よく分かっています。

こんなことは想像さえできなかった。

私の心はあなたのために悲しみの血を流しています。

紳士4 父君が生きておられたら、私と同じように胸がつぶれていたでしょう。

どうしてこんな酷い冷酷なことをしたのですか？

夫

手短にいえば、

私は全ての財産を蕩尽し、賭博で土地を無くしてしまいました。
それで、貧窮を防ぎ、家系を絶やすことが
私にできる最高の慈善だと思ったのです。

騎士 ああ、冷静になったら後悔するぞ。

夫 もう後悔しております、一人殺し損ねたことを、
乳母の下にいる餓鬼を。ああ、あいつを本当に楽にしてやりたかった。

騎士 明日の判決によって、
恐怖がお前の魂に宿るにちがいない、
死という恐ろしい思いを度々考えることによって。
もっとそうなるために、私の真剣な意見を心に留めるがよい。
これ以上に自然の理に逆って行われた行為はない。

夫 お言葉、感謝致します、閣下。

騎士 彼を牢屋へ連れて行け。

徹底的に正義が求められる時には、憐憫の情など不要なのだ。

夫 さあ、さあ、連れて行ってくれ。（囚人として夫退場）

学寮長 閣下、貴方はこの職務にふさわしいお方です。
皆がふさわしい人であればよいのに。貴方の許では法律が神の恩寵と
なるでしょう。

騎士 私もそうあって欲しいと願っています。彼は破壊をもたらす男、
家の嘆きの源、
先祖代々の名誉ある家の汚点。
あの男は羞恥心を持たぬ、最も恥知らずな男です。（全員退場）

第8場

（獄吏に連れられた夫、学寮長、紳士たちが夫の家の前を通る）

夫 ここは俺の家、先祖代々の屋敷だ。
妻は生きているが重傷だと聞いた。

どうか彼女と話しをさせてくれ、

牢獄に繋がれてしまう前に。

（妻が輿に乗って登場）

紳士 彼女がやってきた。

妻 ああ、私の愛しい夫、悩み苦しむ、愛する夫、
あなたは情け容赦のない法律の手の中に落ちてしまった。
これは私の最大の悲しみ、血を流すようなひどい悲しみです。
私の魂は今、血を流しています。

夫 おい、俺にまだ優しいのか？

俺はお前を傷つけて、死にかけているお前をそのままにしたのに。

妻 ああ、もっともっと大きな傷を私の胸は感じていました。
冷たい態度は剣よりも深い傷を作るのです。
あなたは私にずっと冷たかった。

夫 本当にそうだった。
俺は殺人を犯した、激高して、抑えがきかなくなって、
必死で、衝動的だった、だけどお前は今
俺を殺す素晴らしいやり方を見つけた。お前は俺の目に
七つの傷を別々に刻みつけたのだ¹¹。今や悪魔が俺から去ろうとし、
それぞれの関節から離れていき、俺の爪を膨れあがらせている。
ああ、この悪魔に今まで誰も考えなかったような苦しみを与えてくれ。

11 ダンテの『神曲』『煉獄編』において、煉獄山の前域を登り終えたダンテは煉獄の門を通して煉獄の本域に入る。その時、天使が剣の先でダンテの額に7つのPの文字を刻む。Sette P ne la fronte mi descrisse/ col puntón de la spada (*Purgatorio*, IX, 112-113). Pは罪を意味するラテン語 *peccatum* に由来し、この7つのPはダンテが7つの環道を昇ることで清めるべき7つの大罪を意味している。Pの文字はダンテが環道の一つ昇る毎に一つずつ消えてゆく。「七つの傷」の背後にはこのようなキリスト教的思想があると思われる。

そいつを何重にも縛ってくれ、祝福された天使たちよ。

底なしの穴にいて、そいつが再び起き上がって

自然に反する悲劇を人間に演じさせないように、

そして、父親の中に入りこんで、怒らせて、

子供の処刑人にし、

妻や召使いや他の人々を殺させないでくれ。

そんな男は神の恩寵から外れ、天国が忘れさられた闇の中にいるのだ。

妻 ああ、あなた、改心しているのね。

夫 愛しいお前、俺はお前をあまりに不当に傷つけてしまった。

俺は死を切望する、ああ俺は死を望んでいる。

妻 そんなこと望んではだめです、絶対に。なぜならこの「過失」こそが
死ぬのです、

もし法律が、私と同じようにすぐにあなたを赦せば。

（子供たちの死体が舞台端に置かれる）

夫 あの光景は何だ？

妻 ああ、血を流した私たちの子供があのだ敷居の所に。

夫 見る者の心臓をばらばらにするような重みがそこにある。

ああ、もしもお前たちの可愛い魂が

天から父親の目の中を覗き込むことができるのなら、

後悔する俺の目が涙で溶け、

お前たちを殺害したことで、涙が俺の頬に滂沱と溢れているのが分かるだろう。

しかし、今やお前たちは天使の膝の上で遊び、

俺を見ることもきとない。

俺は優しい気持ちを持てず、貧窮を怖れてお前たちを殺してしまった。

ああ、願いを叶えることができるなら、

お前たちが生き返ってくれることを願いたい、

たとえ、恐ろしいことに、お前たちに赦しを乞わねばならなくなるとしても。

ああ、俺の目を霞ませたのは敵なる悪魔だ。

ああ、天が俺を赦してくれるようにお前たちが祈ってくれることを望むばかりだ。

そうすれば命が終わるまで改悛の情を持って俺は生きるだろう。

妻 あなたの言葉を聞くと、他の悲しみを全て忘れて、
私も一緒に嘆いてしまいます。

獄吏 おい、行くぞ。

夫 俺が流させた血にキスをさせてくれ、そうしたら行こう。

俺の魂は血を流している。唇にもそうさせよう。

さらばだ、愛しい妻よ、今やお前と別れねばならない。

お前を傷つけたことを心から後悔しているよ。

妻 ああ、待って、行かないで。

夫 そんなことを言っても仕方がない。分かっているだろう、こうしなければいけないのだ。

さようなら、血にまみれた息子たち、

俺に与えられる罰は、彼らの永遠の喜びとなるだろう。

世の父親は俺の行為を知るがよい、

そうすれば彼らの子孫は繁栄するだろう、俺の跡継ぎは血を流したが。

妻 このようなあなたの悲しみを聞くと、私はもっと惨めに感じます、
以前の悲しみよりも。

（夫と、矛を持った獄吏、退場）

学寮長 優しい奥さん、

安心してください。一つの希望はまだ殺されてはいません。

あなたには乳母の許に男の子がまだ一人います。あなたの喜びは彼と共にあります。

妻 何よりも今私にとって大切なのは可哀そうな夫の命です。
 天よ、私の身体に力をお与えください。血を失いすぎたせいで
 力が抜けます。ああ、私は跪き、
 夫の命乞いをし、私の友人たちを皆集めましょう、
 大切な夫の助命を嘆願するために。

学寮長 こんなに優しい人を殺そうとする人間がいたとは！
 あなたのお蔭でこれから私はずっと女性を賛美していくことでしょう。
 私はこの悲しみを持って戻らねばなりません。答えは決まりました。
 借金よりも重い知らせを持って帰りましょう。
 二人の兄弟。一人は連帯借用書によって破滅させられ、
 もう一方は恐ろしい罰へと向かっているのだ。

（終）

